

登壇者：田中洋史（長岡市立中央図書館文書資料室 室長）

太田朋子（宮城県図書館資料奉仕部震災文庫整備チーム 主査）

堀田弥生（(国研)防災科学技術研究所 客員研究員 兼 防災専門図書館 司書）

熊谷慎一郎（図書館総合展運営協力委員）

熊谷 ここまでで3名の登壇者の方からお話をいただきまして、これからディスカッションの時間としたいと思います。

前半で、堀田さんからは課題の整理、田中さんからは中越地震のお話、太田さんから東日本大震災のお話をそれぞれいただいたわけですが、折々触れていただきましたように、私も宮城県図書館に勤務しており、震災と図書館にあれこれ関わりました。何度かお話しさせていただいたこともあるので、聞かれた方もいらっしゃるかと思います。

今日の災害アーカイブで言えば、デジタルアーカイブの構築、企画。総務省と予算の調整などを、2年がかりぐらいでやっていました。東日本大震災の話が続けますと小さい図書館を運営しているようなもので、いろいろな資料、1枚物の資料から、旧来、図書館が扱っていないようなものも含め、図書も雑誌も視聴覚資料も、少数の人数でやっていました。

東日本大震災から6年8カ月たっているということもあり、私自身も今2年半ぐらい、図書館を離れている状況にあります。太田さんは「2年業務を引き継いでいます」ということで、業務の内容の検証、変化等々、現状について、聞いてみたいと思います。いかがでしょうか。

太田 私が引き継いだ直後に熊本で地震がありました。熊本の方から「先行するアーカイブをされていますが、どういうふうになられたのですか」と問い合わせが来ました。そのとき、まだ私は作ったことがなかったんです。

実は去年職員が大分変わり、その前に携わった兼務職員が1人しか残っておらず、その方も途中でお休みに入られて、誰もいないような状態になってしまいました。その中でもやっぱりお役に立ちたいということで、中でいろいろなものをひっくり返して探してみて「こういうふうなことでやっていたよ」と、お答えしたんですけども、ずっと走ってきたということもあり、それまでの経緯をまとめるところまでいかなかったものですから、業務を把握するのがなかなか大変ということがありました。ですので「アーカイブを作成しつつ、かつ、まとめる」ということが大事ではないかなと思いました。

それから今でも課題として「今まで当館に無かった資料が多いので、それをどうしよう」と

ということがあり、いろいろ参考にさせていただきながら整理しています。

熊谷 そうですね。走っている人は、一旦立ち止まって、まとめるということに、なかなかならなかったなという反省もあり、今に至っています。

田中さんのところでは10年以上がたっていますが、いかがでしょうか。

田中 そうですね。中越大震災（2004年新潟県中越地震）から13年になります。先ほど堀田さんから震災に関する業務の生みの親と言われまして非常に感慨深く思いました。

13年間関わっているなかで、業務の継承という観点でお話すると、文書資料室でも様々な変遷がありました。中越地震発災当時、私は非常勤嘱託員という立場で震災対応の業務、特に被災した歴史的資料の救済活動（文化財レスキュー）を中心に担当しました。本日のテーマの震災関連資料の収集については、別の嘱託員が担当して、アーカイブ構築の基礎をつくりました。私が震災関連資料に関する業務を引き継いだのは、平成21年4月に文書資料室の歴史的文書（郷土史）専門職員として正規職員採用になった後です。発災から時間がたって、文化財レスキューの活動が落ち着いてきたことありますが、平成23年3月に東日本大震災が起こって、長岡市内に開設された避難所の掲示物などを震災資料として集めたり、中越地震の経験を発信する機会をいただいたりしたことが契機になりました。

そして、3年前に室長という係長級の管理職になりました。今度は、係員である嘱託員の皆さんに、業務を振り分け、引き継いでいくかが課題になりました。長岡市資料整理ボランティアの活動については、ほぼ引き継ぐことができました。係員とボランティアメンバーが市民協働で、輪になって活動しています。それが非常にいい光景なんですね。引き継いで良かったというのが、正直な感想です。

まだまだ未整理の資料も残っています。長岡市災害復興文庫を育てていくためには、どのよに業務を継承させていくか、人の異動は宿命ですので大きな課題と考えています。

熊谷 ありがとうございます。実情をすごくよくご報告いただいたかなと思っております。

人はどうしても変わっていかざるを得ないところが組織体としてはあります。その辺を含めてアーカイブといったときに、使う側からの問題提起があるのと同時に、今日ここでお話ししているような、提供する側、プロバイダー側の課題が実際にはあります。

ある程度お金を負担して、自治体なり公的機関が構築して提供している意味というのは、そういうところがどうしても避けて通れないというのが今現実としてあります。

残り時間の都合もありまして、今日お集まりいただいている会場の方で、何か聞いてみたいところ、ありますでしょうか。もしいらっしゃいましたら、挙手いただければと思います。

（挙手有り）では、どうぞ。

質問者 本年7月、九州北部豪雨で被害に遭った日田市からきました。

先ほど、田中さんが関係機関といろいろ連携をやっていて。その関係機関というのは、具体的にどういうところなんですか。

田中 具体的には市内外の図書館、博物館などの関係機関・団体、大学などと連携しています。特に新潟大学災害復興科学研究所、新潟大学人文学部のアーカイブ分野、歴史学の先生方とは日常の活動における連携とともに、成果報告としての刊行物の発行も共同で行いました。本日配布しました長岡市災害復興文庫のパンフレット裏面の刊行物一覧をご覧ください。『山古志の文書と民具』（平成24年）、『震災避難所の史料』（平成25年）、『新潟県中越地震・東日本大震災と災害史研究・史料保存』（平成28年）の各図録は、新潟大学との連携事業として初版を発行していただきました。それらを長岡市の予算で再版して、市民の皆さんに広く頒布しています。こうした様々な研究機関・団体などと連携しながら、ご理解・ご協力をいただきながら、長岡市災害復興文庫の構築・発信を行っています。

質問者 ありがとうございました。大学などとの連携、これを今後の災害に生かしたいということで、本日お聞きしたんですが、消防本部、消防、警察、自衛隊との連携は考えていないのでしょうか。

熊谷 （宮城県図書館で）ありましたよね、自衛隊などと一緒に。

太田 そうですね、自衛隊さんが当館にいらっしゃった時に、貴重な資料をお持ちではとお話をさせていただいて、データを提供していただきデジタルアーカイブのほうに載せております。最近新たな連携はなかなかできていないところもあるのですが、その他にもNPOさんですと大学さんからいただいたりすることもありました。

質問者 わかりました。ありがとうございます。

熊谷 ありがとうございました。

関係機関との連携は、幅広くできていて、いろいろなところから実際に声がかかったりしますし、あるいはこちらから声をかけていくと応えてくれることもよくありましたので、いろいろな災害に遭われて、それからどう残すか、どう伝えるかといったときに、ちょっと考えていただければいいのかなど。思わぬところから展開していくことは十分にあり得ると思いますので、これから頑張っていたきたいなと思います。

そろそろですけども、何か言いたい人とかいますか。

ちょっと1件だけ、事前にメールをいただいていた方がいらっしゃいました。

豪雨の話で、デジタルアーカイブなのかな、作っていきたいということで、「業務をどういうふうに優先順位をつけていったらいいか。あるいはデータの作り方で、まず公開するまでにどういことをしたらいいかが、なかなか掴みづらい」と。

宮城県図書館では財源の関係で、事業のスキームが1年ぐらいの期間で作らなくてはならないものでした。どう使われるかを想定し、どういデータを作り、どうい並べ方にして、どんなコレクションにするか、と「一定の仮想的な使われ方」を作りつつも、あとはもう走りながら作ってしまう。

さっき、デジタルアーカイブを構築してからまたスタートですよと太田さんが言っていたんですが、まさにそのとおりで、何年かに一遍、ローリングをかけて、データの再構成とか再整備とかをしなきゃいけないだろうと思っております。

堀田さん、何か一言ありますか。

堀田 もうお時間がないので、最後にちょっとだけ、紹介したいことがあります。今までのお話になかった利用者目線からのご紹介です。私たち図書館側は、提供した資料がどう使われたのか、あまり知る機会がないかと思っております。

防災教育の世界で「図書館の資料だけではなく、いろいろな地域のアーカイブ資料を使って災害を伝える」ことをされていらっしゃる方々があります。私たちはその成果をまた資料や情報として受け取って、さらに他の利用者に「この方たちはこういった活動をしていらっしゃるんですよ」と伝えて興味を持ってもらう。このような例2件、ご紹介したいと思います。1件目は、千葉県の柏市立柏高校の図書委員会で、文化祭展示なんですけれども、ちょっと高校生とは思えないレベルの展示をされていて、その資料を本日お借りしています。(客席に見せる)、防災科研のブースで展示しています。資料の活用例として参考になるかと思っておりますので、ぜひご覧ください。

もう1件は、継承という本日の課題にふさわしいかと思っております。「防災教育」でよく取り上げられる、舞子高校(兵庫県)さんの例です。舞子高校さんは環境防災科を日本で初めて創設されました。今は、宮城県多賀城高校さんにも災害科学科が設置されています。この資料のタイトルはその名も『語り継ぐ』ということで、環境防災科ができてから、3年生がこのような形で体験記を残しております。被災当時、小学校2年生だった子どもたちから始まっておりまして、もう22年経っておりますので、今の世代にとっては、当然ながら生まれる前の話なので、親からしか聞くことができない。でも、それをこのような形で語り継いでいるということで、ご紹介します。

このように、図書館の資料を使いつつ使われつつアーカイブ活動をするためには、図書館は災害資料を収集して残さなくてはならない。デジタル化をするとかしないとかの前に、やっ

ぱりまず集めなければ、そこが一番重要なことだと思います。

あと、おまけでご案内させていただきます。被災地図書館間の連携を防災科研でサポートしております。自然災害情報室がホスト役となって、災害資料をアーカイブする図書館のメーリングリストを始めました。もし会場でご興味のある方がいらっしゃいましたら、この後防災科研のブースにぜひお越しください。以上です。

熊谷

ありがとうございます。時間の制約もございまして、疑問、質問等あるかと思しますので、この後会場の向こう側にコマ番号C-3、防災科研のブース、コミュニケーションブースがございまして、C-1に宮城県図書館のブースがあります。この辺の人たちが立っていると思しますので、ぜひフォーラムを回った合間合間に来ていただいて、個別にお声がけいただければと思います。

そして、災害アーカイブのパネル展も、この会場内、こちら側のサイドでやっておりますので、ぜひご覧いただければと思います。我々を会場で見かけた際には、気軽にお声がけいただければと思います。

では、以上をもちまして、図書館総合展事務局と防災科学技術研究所共同企画のトークイベント「災害アーカイブ構築のノウハウ ～アーカイブの継承を考える～」を終了とさせていただきます。

本日は、お忙しい中お集まりいただき、まことにありがとうございました。

(会場拍手)

— 了 —